

弊誌30号の近畿圏アクティビズムマガジン座談会にもう一人、三重県鈴鹿市から参加した片山弘子さん。鈴鹿カルチャーステーションを開設し2年が経過した。まちに縁側を作ろうという、新たな試みが鈴鹿のまちに広がっている。

### おしゃれでおもしろそう

鈴鹿カルチャーステーションをスタートして満一年がたちました。きっかけは、も

ともと鈴鹿市平田地区には「ミニユーニティ活動をしている人たちが多く、「いつでも立ち寄れる落ち着いた空間が欲しい」という希望があったこと、もう一つはNPO法人循環共生社会システム研究所（K-ESS：代表 内藤正明先生）で学んできた循環共生のまちづくりを、実際にやってみようといつ仲間ができたことです。

まず2009年11月にK-ESSとの共

催で公開シンポジウム「足元からつくろう循環共生社会」を開き、放置されてい

た廃チナントを再生して街の文化発信基

地として育てるという、私たちの趣旨と構想を発表しました。「まちの縁側、学び舎、エコステーション」を目標に、市民が

私たち設立メンバーの得意技や持ち味を發揮しやすいこと。その上で共通の夢を織糸に、横糸として人の輪づくりやモノの循環をどう仕掛けいくか、地域の皆さんとの潜在的な夢に繋がるような物語として、どう織り上げるかをすいぶん話し合いました。話し合った内容より、むしろやりとりそれが勉強でした。お互いにあるで初めて会う人のように出会い直していく感じや、なぜそんなことを言うのだろうと批判がましく思つたり、逆にムキに言い張る自分の状態に気づいたりでした。やりたい、やべつとう熱意だけでは実現しないなあといしみじみと思い、NPO法人サイ

### 夢を縦糸に人の輪を横糸に

主役になれ、ちょっとおしゃれで小回りがきく場所——私たちもその仕事で生計を立てられるような「ミニユーニティビジネスを夢に、スタートメンバーで最大限工夫して資金を集めました。おかげさまで寄付があつたり知人の応援があつたり、中でも特に「なんとなく面白うそうなので」と口々に来訪者や企画参加者が広がつたりしたのも大きなことでした。

エンズ研究所（代表 小野雅司氏）の協力を發揮し、話し合いの出来る状態になつていて、うと、それぞれが学んでいるところです。まちづくりといつても、実際は日々のさまざまな形の話し合いが基本です。自分も人もどちらも人として尊重されるのなら、どう共に生きていくか、その道と一緒に見つけること、その過程 자체が鍵だと気がつくようになりました。せっかく一緒に始めた者同士、ルールや互いの道徳観で責めたり縛りあつてではなく、逆に自分の心の解放をしつつ協力する——訪れる人たちもそんな空気をキャッチするだろう。そんな中から、まずはエントランスからギャラリーホール、「ミニユーニティカフェ、茶室、美容室、学び舎スペース、貸事務所や会議室を施設として用意し2010年7月3日一般社団法人・鈴鹿カルチャーステーション（SCS：代表 坂井和貴氏）としてオープンしました。以来、0歳児から楽しめるバイオリンコンサートやフランス映画の会、環境講演会などのイベントと、各種文化教室、学習塾、子供向け自然体験企画、サイエンスカフェなどを展開しながら活動を続けています。

## ⑥寄稿 〈未来創成「私たちが変える」〉

# 鈴鹿カルチャーステーションと アズワンコミュニティ

— 話し合いをベースにした縁側づくり —

片山 弘子

鈴鹿カルチャーステーション（SCS）理事／鈴鹿市



- ①SCS外観  
②SCS編み物カフェ  
③環境啓発セミナーとワールドカフェ  
④SCSでらこや一人一人の学びの個性  
⑤SCS子供文化祭  
⑥SCSわらべうの会 風帆上がり  
⑦SCS太鼓チームは地域で人気  
⑧SCS街のお茶会はリラックスして  
⑨SCS図書ルームの子どもたち

